

一一ノ二四、オールコック 大君の都より

出典 オールコック、大君の都(中)、岩波文庫

**解説** オールコックは安政六年五月に着任した英国駐日総領事。文久元年(一八六一年)六月、長崎を出発したオールコックは海路を下関から兵庫へとり、兵庫から大坂へと入り、天皇の居住する京都を迂回して奈良、伊賀上野經由東海道を神奈川へと向かった三二日間の旅行の記録の抄録。

オールコックは本文のように伊賀上野城下での宿泊を避けてその一つ手前の島ヶ原の本陣に宿泊したが、そのときの記録が島ヶ原村本陣 御茶屋文書につきのように残されている。

一、異国人

フロシヤ三人 イギリス  
オランダ 英吉利官吏

和蘭陀官吏

イギリス式人

南金 壹人 料理人

右者五月十三日大阪表出立、同十三日南都泊リ同十四日當宿泊リニ相成リ御道々ニ而

御公役 竹内唯助様

野口善太夫様

遠見番、御兩人

船番 御兩人

御通詞三人

筆者 御兩人

右御本陣附御公役御上下拾九人様、御下宿七軒御人数御上下

七拾五人

異国人六人

一、人足式百五拾人 御用立

一、馬三拾疋 御用立

一、金式兩 御本陣へ異国人御茶料

右之通り異国人通行ニ相成リ御公役御道々ニ而御通行被為遊候 嶋ヶ原宿より佐那具宿繼立

ニ相成、柘植宿休亀山宿泊リニ而江戸表着

右之通り無滞相済申候控

文久元酉年

五月十四日

右先触之写し前々月より大庄屋所御出役ニ相成御持帰リニ相成先触の写し無御座候

## 原文

第二九章 大坂から江戸へ

(前略)

われわれはもう江戸へかなり近づいており、旅行の最後の段階にきていた。京都へゆくことは見合わせることを承諾していたので、京都を避けるためにまわり道をしなければならなかった。そのためにおそらくヨーロッパ人がまだかつて足を踏み入れたことのない土地をとおることになった。

(中略)

われわれは、無数の小さな村を通りすぎ、村ではやかましい多くの農民を見かけた。

そして護衛の者たちより先にすすんでみると、はじめて民衆が悪感情をもっているのに出くわした。かれらは、われわれのうしろから、「唐人、ババ」とやかましく叫ぶのだった。

「唐人」とは中国人のことであり、ババとは行商人、または貿易商のことであり、また老婆をも意味する。かれらの考える外国人とは、ただ中国人の商人だけなのである。子供ばかりか大人さえも、村から村へとわれわれのあとをつけてきて、うるさくつきまとった。

一、二度、一行中のだれかが振り向くと、かれらはクモの子を散らすようにうしろの方へ逃げ出した。おかげでわれわれはしばらくのあいだほっとしたが、やがて息をいれて勇気を取り戻すと、またもやかれらはあとを追ってくるのだった。じつをいうと、わたしは、われわれといっしょにいる者たち、すなわち、われわれの護衛の役人がかれらをけしかけているのではないか、という疑いをもたないでもなかった。役人たちは、かれらの都合でわれわれの出発を一日遅らせたがっていたし、かれらの思うようにはなく、われわれのきめた時間に旅行をはじめなければならなくなったので、きげんが悪かったのである。このように人びとがつきまとったのは、まったく異例のことであった。すくなくとも、そんなにまで、つきまとったことは異常だった。それ以前にも、それ以後にも、二度とこのようなことはなかったのである。

平野のはずれで、木のよくしげった高さ約四〇〇フィートの山系(金剛山脈)にさしかかっていたので、朝早く馬にのってゆくのは大変楽しかった(われわれは五時に出発したのだった)。山頂からは、とおってきた平野全体が見事に見渡せ、反対側には谷間があつて、前の方に横たわり、また別の山脈に囲まれていた。引き馬をしながらゆつくりと登っていくとウグイスのとても美しい声か耳にはいった。ナイチンゲールの声と似ているところがあり、日本では歌う鳥はこの鳥ぐらいとわたしは思う。

(中略)

つぎの日に、ゴイク(Goick)に近づくと、東海道(「奈良街道か」の両側に山が迫り、谷をつらぬいて川がうねっていた。

(中略)

山を下り、いましがた出てきた平野と同じ作物が栽培されている広い谷間を横切つてから、われわれは宿泊地である奈良に着いた。つぎの日、われわれはまた、夜が明けるとすぐにつぎの宿駅である笠置(カサヅキ)に向かって出発した。笠置までは、わずか三里(約八マイル)

ということだが、実際は十五マイルはたつぷりあった。

(中略)

この朝、われわれが通った土地の美しさにまさるものはあるまい。われわれは、山と溪谷が混然と入り乱れているあいだの狭い山道を通っていった。山は重畳と相重なり、逆巻く怒濤がとつじよとして化石となったようにも見えた。ここは、ずっと昔に火山の爆発したあとだったに違いない。何マイルにもわたって半ば埋もれた火口が特徴となっていた。九州でもいつも見かけたのと同じ砂岩層がまた現れた。そして日光が、この火口全体にさんさんと降りそそいでいたために、荒涼たる様子が一層はつきりした。この道は、左手の京都を避けるためにとつた回り道だった。このために、われわれは幅わずか五、六フィートの間道に出て、山麓を回り、行き先の町と同名の川の処まで出た。ここではじめて耕作のできるような山すその片すみや谷間に、茶畑がムギ畑やワタ畑に対して一種の境界か垣のようになっているのが見られた。

それからわれわれは、谷間を横切っている幅の広い流れの早い浅い川「木津川」に着いた。われわれは、馬といっしょに舟でこの川を渡った。そして向こう岸に着いてすこしすんでから、昼食をとるための休息所を見つけた。われわれとは反対側の山の中腹に、イチ(ITCH) 候の館が見え隠れしていた。ガウアー氏は、この館を写真に撮ることに成功したが、それをここにかかげるだけの値打ちはほとんどない。大名の邸宅は大名じしんと同じようなもので、外観を見ただけでは余りわからぬものであるからだ。

(中略)

大坂を発つて三日目に、副奉行とその同僚のたつての望みで、われわれの宿泊場所の予定が変更された。変更の理由は、気まぐれな納得のゆかぬものであった。日本の官吏があげる理由は、たいていみなそうなのである。しかし、かれらが本当の理由をいうはずがないことははじめから分かっている。現実を示された理由はただの形式であると人は見なし、他の理由からだと考えようになる。彼等はサキ(Saki)に泊ろうと提案して、その方が便利だとか、近いとか(これはうそではなかった)、あるいはわれわれが最初泊ることになっていた上野ではわれわれを迎えるに適した家がみな修繕中だとか、いった。かれらが予定を変更しようといけんめいになっていたところを見ると、かれらにはかれらなりのなにかもつともな理由があるのは分かりきつたことだった。そこでわれわれは、かれらの提案をうけいれた。

ところがつぎの日、われわれが一時間ほどで上野に着いたところ、かれらがあげていた理由にはなんの根拠もないばかりか、なにかほかの強い理由があつて、それをかれらは注意ぶかくかくしていたのだ、と結論するのに十分な理由があつた。まず第一に、家が修繕中だということについていうと、ここは大名の城下町で、ひじょうに大きな場所であり、一方、われわれの泊った町はちよつとした部落程度のものでしかなかったのである。

通りを行くと、どの家もどの横丁もぴったり閉めきってあった。ささやき声ひとつ聞こえず、ネコの子一匹見あたらなかった。横町には、全部柵がしてあって、高い竿に幕を張り、向こうが見えないようにしてあった。大名の邸宅の前を通ったが、ここにも同じように幕が張ってあった。

(後略)